

自薦状としての張華「鷓鴣賦」

田中, 順子
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9729>

出版情報：中国文学論集. 15, pp.71-99, 1986-12-31. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：



自薦狀としての張華「鶴鷄賦」

田中 順子

張華（二三二—三〇〇）あざな茂先は、かの陸機・潘岳・左思らと並んで西晉文壇を代表する文人であり、また當代ぎつての博識家として、廣く天下にその名を知られた人物である。そして、この當時第一流の知識人は、同時にまた西晉王朝をその草創期から支えた名臣の一人でもあった。すなわち、魏晉交替期に當たる正元二年（二五五）に太常博士として起家してから、王朝滅亡への一契機となった、かの趙王倫の亂において非業の最期を遂げるまで、彼は常に身を挺して王朝の體制確立とその維持のために奮闘している。のみならず、この間に野に埋もれた人材を數多く發掘し、彼らにその才能を發揮する機會を與えたこと(1)も、この時代における張華の存在の重みを確認する上で、決して看過することのできない功績である。

自薦狀としての張華「鶴鷄賦」（田中）

さて、この様々な分野において西晉を代表すべき士大夫たる張華が、その無名の青年時代に著わしたと伝えられるのが、これから小論で取り上げようとする「鷓鴣賦」である。⁽²⁾ その趣旨は、次に挙げる序文にはば言い盡くされていると言つてよい。すなわち、

鷓鴣は小鳥なり。蒿萊の間に生まれ、藩籬の下に長じ、尋常の内に翔集して、生生の理もて足るなり。色は淺く體は陋しければ、人の爲めに用ゐられず、微に形れ卑に處れば、物これを害する莫し。族類を繁滋し、乘居匹游して、翩翩然として以て自ら樂しむ有るなり。彼の鷺鷥・鵝鴻、孔雀・翡翠は、或ひは赤霄の際を淺ぎ、或ひは絶垠の外に託し、翰舉すれば以て天に冲するに足り、翬距は以て自ら衛るに足る。然れども皆矰を負ひ繳に嬰りて、羽毛は貢に入る。何者、人に用ゐらるる有ればなり。夫れ言には淺なれども以て深きを託す可きもの有り、類には微なれども以て大いなるを喩ふ可きもの有り。故に之れを賦して爾云ふ。

以上の序文を一讀して明らかなように、張華の「鷓鴣賦」は、いわゆる莊子の萬物齊同の思想を根據として微賤なる存在にも積極的な意義を見出し、それを全肯定的に詠じたものである。この主張は作品全體を通じて首尾一貫し、その完結した世界には一縷の破綻もない。そして、作者張華は常に第三者の立場を取つてはいるものの、心情的にはこの微細な鷓鴣に自己を假託していること確實である。

ただ、この「鷓鴣賦」における張華の言い分を、言葉の紡ぎ出した内容そのままに彼の生身の内面に移しかえてよいものか、私は少なからず疑問を覺えるものである。というのは、輝かしい表舞臺に立つことを拒み、自ら草茅の間に埋もれんとする意志を詠じたかのように見えるこの賦が、實はその内容とは裏腹に、年若い一介の地方吏員

に過ぎなかつた張華を一躍有名にするという役割を擔つたからである。すなわち、後程詳しく検討するように、かの阮籍がこの賦を見て「王佐之才也」と評し、それを契機として官界へデビューしたというエピソードが伝えられている。また、それに加えて、中央官界へ出てから後の張華は、おおむね順調にその才能を發揮する地位を得ており、この賦から直接的に窺われるような隱遯志向は特に持たなかつたように見受けられるからである。

さて、このように作品の内容とその社會に對する働きかけとが著しく背反する、現代の我々から見れば甚だ欺瞞に満ちたと言えなくもないこの張華の「鶴鶴賦」について、從來二通りの解釋が行なわれている。今、小論の視點をはっきりさせておくために、この先行する二篇の論文についてその概略を紹介し、併せて若干の問題點を提起してみた。

まずその内の一つは、林田愼之助氏の「魏晉南朝文學に占める張華の座標」(『日本中國學會報』第十七集)と題する論文で、その第一章がこの賦のために充てられている。氏はこの中で次のように論じておられる。すなわち、この「鶴鶴賦」に表われた「小宇宙の思想」、つまり萬物全ての價値を相對化し、その中で自己の分に相應した安住自足の境地を得ようとする哲學は、魏晉の間という險しい時代情況を鋭敏に反映したものであり、この時代の知識人全てに共通する、生きることの恐れと不安の意識を表明したものである。ただし、張華が魏末の阮籍・嵇康の反體制思想と訣別し、浮華に流れる西晉貴族と何の屈託もなく交わるようになる素因は、すでにこの賦の内にも認められる。それはすなわち『文心雕龍』才略篇にも評するように、この賦の寓意が『韓非子』の説難、つまり對象の心理を洞察しながら様々な危機を切りぬけようとする法家的論理でもあるということであって、この論理にの

自薦狀としての張華「鶴鶴賦」(田中)

せて老莊の小宇宙の思想を展開したところに、彼の俗流との結託が予見される、と。この林田氏の説は、いわゆる莊子の思想が、放誕な行爲によつて新興權力への抵抗を表現したとされる、竹林の七賢たちの思想的専有物であつたという前提に立ち、張華の「鶴鷄賦」も同じくその構想を「莊子」に依據していることから、兩者の間に、同じ情況を生きる者としての内面的な繋がりを見出そうとするものである。

ただここで、魏晉交替期における「莊子」の流行を、儒教精神を標榜しつつ國權收奪を目論む司馬氏への抵抗運動として捉えることが、果して妥當かどうか、なお多分に検討の餘地を残しているように思われる。また、ごく素朴な疑問として、名もない一介の若者が、當時における屈指の名士であり、それだけに權力者側から常にマークされていた阮籍・嵇康らと、全く同様の危機意識を持ち、同じ恐怖にうち震えねばならない必然性が一體どこにあるのだろうか。實際、この時期に司馬氏によつて抹殺された多くの著名人士が確かに存在する一方で、大部分の官僚は、兩朝にまたがって恙無く職を得ているのである。氏はこのような事實をほとんど問題視せず、既成の文學・思想史的知識の上に論を構築しているように見受けられる。そしてそれが故に、この「鶴鷄賦」の中に俗流との結託の萌芽を認めようとする後半の説が、いささか唐突な、牽強附會の感を免れないものとなっているようである。

さて、張華の「鶴鷄賦」に對する今一つの解釋は、故中島千秋博士の「張華の『鶴鷄の賦』について」(『支那學研究』第三十二號)という論文である。氏はこの賦を阮籍の「大人先生傳」との關連において解釋される。つまり、かの「大人先生傳」は、超越者たる大人先生が全宇宙を股に掛けたその遍歴の途上、仕官の士・世俗を憎惡する隱者・時を俟って山間に雌伏する薪取りの三人に出會い、その各人の生き方を批判するという趣向を持つのだが、こ

ここに登場する大人先生と仕官の士とを、張華の賦にいう極大・極小の生物にそれぞれ結びつけ、この大小いずれにも屬さぬ中途半端な存在として鶴鶴を位置づける。そして、超俗的な大鵬にもなれず、かといって極小の微生物に比べればなお餘りある、この鶴鶴という鳥を詠ずることによって、張華は仕官できないわが境遇への不満を暗示したのだという。極言すれば、この賦は老莊的表現でその野心をカムフラージュした自己推薦状だというわけである。

結論の大筋としては、私はこの中島氏の説に賛同するものである。ただ、阮籍がこの賦を評價したという逸話を根據に、「鶴鶴賦」が「大人先生傳」を直接に踏まえた作品であるという前提を作り、その上でこの賦をパズルを解くように解析する、その論證の仕方には多少の疑問を覚える。そして、これは本題からは外れるのだが、阮籍を大人先生と同一視し、更には張華の賦における大鵬に彼を直結させることにも異論がある。⁽⁴⁾ たしかに『晉書』阮籍傳にも言う通り、「大人先生傳」は彼の本懷を表わしたものではあるが、それはあくまで本懷の一部にすぎず、實は彼もまた一方では、張華の「鶴鶴賦」と全く同趣旨の作品を残しているのである。このことは、林田氏が先に挙げた論文の中で詳細に論じておられる。

さて、以上に紹介した兩氏の論考を参照させていただいた上で、本稿ではそのなお再考の餘地のある部分を掘り下げ、この張華の「鶴鶴賦」を魏晉の文學・思想上にどう位置づけるか、私なりに考察しなおしてみたい。すなわち、内容的には隱潛を志向するかに見えるこの賦が、なぜ彼を官界へデビューさせる契機となり得たのか、これが本稿の論点である。

二

さて、本格的な考察に入る前に、一つだけ確認しておかねばならないことがある。それはすなわち、この賦はいつ作られたのか、そして、これを見た阮籍が張華の才能を認めたという逸話は、果して信頼するに足るものなのか、という問題である。

張華が「鶴鶴賦」を著わした経緯について、『晉書』本傳は次のように説明している。すなわち、

初め未だ名を知られざりしとき、「鶴鶴賦」を著はして以て自ら寄す。……陳留の阮籍これを見て歎じて曰く「王佐の才なり」と。是に由りて聲名始めて著はる。

そして、この記事に次いで、郡守鮮于嗣の推薦により太常博士として起家したことが記されているので、張華が「鶴鶴賦」を著わしたのは、彼がまだ故郷の范陽（現在の北京市郊外）に埋もれていた二十歳前後の頃だと、『晉書』編者は見ていたことになる。

この現行本『晉書』が恐らく依據したであろうと思われるのが、次に挙げる『王隱晉書』の記事である。

阮籍、華の「鶴鶴賦」を見て以爲く「王佐の才なり」と。中書郎成公綏も亦た華を推して文義己れに勝るとす。（『類聚』卷五十六、雜文部二引）

ここで賦の制作年代が明示されていないこと、及び成公綏が張華を推したという記事(5)以外は、阮籍の評語もそのままに現行本『晉書』へ轉錄されている。

ところが、この『王隱晉書』の記事を眞向から否定する説がある。すなわち『文選』所收の本作品李善注に引く『臧榮緒晉書』がそれである。ここでは、張華が「鶴鶴賦」を作った動機などについて、

張華……少くして文義を好み、墳典を博覽す。太常博士と爲りて、轉じて中書郎を兼ね。雲閣に栖處すと雖も、慨然として感ずるところ有り、「鶴鶴賦」を作る。

という説明がなされている。賦が作られたという、中書郎を兼任した時期とは、すなわち景元五年（二六四）、蜀の地にて寢返つた鍾會を伐つため西征する文帝司馬昭に従つた時で、この間張華は、軍中の書疏表檄等の文書執筆に従事している。そして、この時發揮した文章力を文帝に買われ、都へ歸還してまもなく、本職として中書侍郎に就任している（『書鈔』卷五十七、設官部九引『張華別傳』）。ところが、この年の前年すでに阮籍は他界しており、この點において、先に擧げた『王隱晉書』とは全く相容れないのである。

それでは、以上二つの資料のうち、どちらがより高い信頼性を持っているだろうか。結論から言ってしまうと、やはり『王隱晉書』という阮籍の張華評價の件は動かさせないように思う。なぜならば、『臧榮緒晉書』が張華の生きた時代から約二百年下つた齊の時代に、それまでの西・東兩晉史を統合して成つた、いわば合本であるのに対して、片や『王隱晉書』の方は、同時代人の直接的見聞による記録である可能性が強いからである。王隱はその父銓の遺業を受け繼いで、東晉に入ってから後にこの書を完成させたが、この父王銓は若い頃から著述の志を抱き、事あるごとに西晉王朝の事迹、及び功臣の行狀を私的に記録していたという（『晉書』王隱傳）。それだけに、エピソードの豊富さ、詳細さにおいては、恐らくこの『王隱晉書』の右に出るものはあるまい。⁶⁾そして、阮籍や張華と

自薦狀としての張華「鶴鶴賦」（田中）

いった當代きつての有名な人について、その交渉關係を誤認することはまずないであろうと思われる。

要するに、張華の「鶴鶴賦」が阮籍によって認められたということは、事實とみてはば間違いないように思う。もつとも、この無名の地方青年の作品が、一體どのような経路を辿って阮籍の手に渡ったのか、なお疑問の残るところではある。これについて、張華の才能をいち早く見出し、彼のために幾度となく推舉を圖つた同郷の盧欽が、兩者の仲立ちを働いたのではないか、という可能性が一つ考えられる。というのは、張華が二十歳前後であった嘉平年間、この盧欽は太傅司馬懿の從事中郎となつており（二五〇—二五一）、ちょうどこの時、阮籍もまた同職に就いているからである。あるいは、『王隱晉書』には賦の制作時期を無名時代と限定していないことから、張華が太常博士として成公綏を伴つて起家して以後（つまり二五五—二六三の間）この賦は作られ、それがたまたま阮籍の目に觸れたとも考えられる。だがいずれにせよ、張華の「鶴鶴賦」が、彼の上昇傾向の強い人生におけるごく初期に作られ、それが阮籍の「王佐の才なり」という評價を得ただけは確かである。

三

さて、張華の「鶴鶴賦」が、自分の境遇に安んぜんとするその内容とは裏腹に、なぜ社會的には自薦狀として機能したのか、という問題を考える上で、一つの有力な手掛りとなるのが、前章においてその確實性を吟味した、阮籍の張華に對する評價である。この「王佐之才也」という評語は、明らかに政治的方面での才能を賞揚する最大級の贊辭である。⁸⁾ それでは、阮籍はこの張華の賦の一體どこを指してこのように評したのだろうか。ここで、「鶴鶴

賦」の中核をなす、鶴鷄そのものについて詠じた部分を抄出してみたい。

何造化之多端兮、何ぞ造化の多端なる、

播羣形於萬類。羣形を萬類に播きたるは。

惟鶴鷄之微禽兮、惟れ鶴鷄の微禽たるも、

亦攝生而受氣。亦た生を攝り氣を受く。

育翩翾之陋體、翩翾の陋體を育ひ、

無玄黃以自貴。玄黃もて以て自ら貴くすること無し。

毛弗施於器用、毛は器用に施されず、

肉弗登於俎味。肉は俎味に登らず。

鷹鷂過猶俄翼、鷹鷂も過ぎて猶ほ翼を俄くるに、

尙何懼於置罟。尙ほ何ぞ置罟を懼れんや。

以上の第一段落では、鶴鷄がその持つて生まれた卑陋な資質ゆえに人の用に立たず、よって捕獲される恐れも無いことを言う。そして、これに次ぐ一段落では、この微禽のつづまやかな生態が描寫される。すなわち、

翳薈蒙籠、(草木の)翳薈蒙籠たるあらば、

是焉游集。是こゝに游集す。

飛不飄颺、飛びては飄颺せず、

自薦狀としての張華「鶴鷄賦」(田中)

翔不翕習。 翔けては翕習たらず。

其居易容、 其の居すまひは容れ易く、

其求易給。 其の求めは給し易し。

巢林不過一枝、 林に巢くひて一枝を過ぎず、

每食不過數粒。 食ごとふ毎に數粒を過ぎず。

このように、身邊せいぜい二、三メートル四方の世界の中で、それなりに満ち足りた生活を營む鷦鷯について、次の第三段落では、今度は哲學的觀點からその生き方が詠ぜられる。すなわち、

棲無所滯、 棲むに滯る所無く、

游無所盤。 游ぶに盤ふける所無し。

匪陋荆棘、 荆棘を陋せしとせず、

匪榮萑蘭。 萑蘭はまを榮はれとせず。

動翼而逸、 翼を動やすかして逸はひ、

投足而安。 足を投ゆじて安やすんず。

委命順理、 命めいに委ゆねて理りに順したがひ、

與物無患。 物ものに與おいて患わづらふこと無し。

そして、このように目立たないながら賢明な鷦鷯の生き方を、次に擧げる結びの段落で、張華は更に賞揚し贊美す

るのである。

伊妓禽之無知、

伊妓これこの禽の無知なること、

何處身之似智。

何ぞ處身の智あるに似たるかな。

不懷寶以賈害、

寶を懷きて以て害を買かはず、

不飾表以招累。

表を飾りて以て累おつらひを招かず。

靜守約而不矜、

靜なれば約を守りて矜おごらず、

動因循以簡易。

動けば因循して以て簡易なり。

任自然以爲資、

自然もろまへに任せて以て資と爲し、

無誘慕於世僞。

世僞に誘慕せらるること無し。

以上、張華の「鶴鷄賦」から直接に鶴鷄を詠じた部分を抜き出したわけだが、ここに贊美されたこの鳥の生き方を一言で要約すれば、それは決して自己の分際を踏み越えぬ慎しみ深さだと言えよう。

ところで、この賦を評した阮籍も、寶はその放誕な行爲に似ず、意外にもこの鶴鷄のごとき慎しみ深い一面を持った人物であったという。阮籍が、時の権力者であり、また彼のパトロンでもあった司馬昭に「至慎」と評されたことは、同じ時代の人である李秉の「家誠」に最も早く見えているが、この資料は、かかる人物月旦が行なわれたその場の雰囲気までも生き生きと傳えているので、多少冗長にはなるけれども、今ここにその全文を紹介してみたい。

自薦狀としての張華「鶴鷄賦」(田中)

昔嘗て先帝（司馬昭）に侍坐せしとき、時に三長史有りて俱に見ゆ。辭出せんとするに臨んで、上曰く「官長爲るもの當に清たるべく、當に慎たるべく、當に勤たるべし。此の三者を修めば、何ぞ不治を患へんや」と。並びに詔を受く。上顧みて吾等に謂ひて曰く「必ず已むを得ずして去らば、斯の三者に於いて何をか先んぜん」と。或るひと對へて曰く「清は固より本爲り」と。復た吾に問ふ。吾對へて曰く「清・慎の道、相須ちて成る。必ず已むを得ざらば、慎乃ち大爲らん」と。上曰く「卿の言これを得たるかな。近世の能く慎たる者を擧ぐ可くんば誰ならんか」と。吾乃ち故大尉荀景倩（頤）、尙書董仲達（未詳）、僕射王公仲（未詳）を擧ぐ。上曰く「此の諸人者、朝夕に温恭たり、執事に恪有りて、亦た各其れ慎たり。然れども天下の至慎なる者は、其れ唯だ阮嗣宗のみならんか。これと語る毎に、言は玄遠に及び、未だ嘗て時事を評論し人物を臧否せず。至慎と謂ふ可きかな」と。（『世説』德行篇、劉孝標注引）

以上のように、文帝司馬昭と李秉を含む長史（第六品）三人との會話の中で、官長たる者の遵守すべきは清・慎・勤という三つの徳目であり、なかでも慎こそが最も重要な根本的モラルであるということが、清談的な言葉の綾を伴って話題に上る。そして、この慎たることの最も優れた體現者として、司馬昭は他の謹嚴實直な官吏たちを押さえ、およそ世間からは放誕者と見なされていた阮籍を推したのである。

ここで阮籍に冠せられた「至慎」という評語は、彼が本來持っている心的資質を指すのではなく、あくまで處世的なレベルでの生活態度を評したものだと思われる。すなわち、どのようにでも解釋可能で、しかも言い逃れの餘地を多分に残した玄遠な言い回し、そして時事評論や人物批評等の明確な意思表示を一切回避することは、情勢變化

の激しいこの時代において、無事その社會的生命を保持するための術策だったわけである。ついであるが、禮教を無視した彼の放誕なふるまいも、自己の本意を隱蔽する點において、その慎重さと全く機軸を一にするものだと私は考へる。

ただ、阮籍のこうした慎重さは、それまで司馬昭と李秉たちとの間で話題になっていた、官僚の第一に心すべきモラルとしての「慎」とは、いさかかズレがあるようにも感ぜられる。だが、いずれにせよ權力體制に對して一切積極的な働きかけをしない、あくまで受け身の姿勢であることでは共通している。たしかに、「慎」の體現者として、阮籍はきわめて特殊かつ傑出した人物ではあったろうが、この點においては、彼もまた、この魏晉時代における理想的官僚像の範疇を出ることはなかつたのである。

さて、それでは官僚に慎たることを求めるこの時代の風潮は一體何に由來するのか、という問題については、殘念ながら、今のところ私にはそれを説明するだけの蓄積も力量もない。けれども、誰の目にも明らか現象としてかかる風潮のあつたことは、歴史書の中からも該當する記事を拾い出すことができる。ちなみに、今『晉書』各傳の中から、その生活態度の消極性を稱贊された人々を挙げれば、たちどころに次のような人物たちが浮かび上がってくる。

鄭沖：寒微よ自り起ちて、卓爾として操を立つ。清恬寡欲にして、經史を耽玩す。……眞まことに任りて自ら守り、郷曲の譽ほまれを要めず。是に由りて州郡久しく禮を加へず。

樂廣：寒素もて業わざを爲し、人に知る者無し。性沖約にして遠識有り、嗜慾寡ひよなくして物ものと競ふ無し。

自薦狀としての張華「鶴鶴賦」(田中)

廬欽：清澹にして遠識有り、經史を篤志す。孝廉に擧げらるるも行かず。

皇甫謐：貧に居り、躬みづか自ら稼穡す。……沈靜寡欲なり。始め高尚の志有りて、著述を以て務めと爲し、自ら

「玄晏先生」と號す。

この他にも、やや時代は下るが、張華がその「玄居釋」を見て絶賛したという束皙、また良吏傳にその事迹の傳わる胡質・威父子、及び竇允ら、愼なることをもって稱された人物は枚擧にいとまがないほどである。ここに擧げた人々は、必ずしも安直に一括することのできない多様性を含んでいるが、その共通項として、愼しやかな自給自足的生活の中で、士大夫としての必須教養である經史を學び、また時勢の流れに對して遠識をもつて臨む者の多いことは注目に値する。

そして、このような消極的かつ愼重な人生態度は、官僚として推擧される際にも、大きくプラスに評價されたようである。たとえば、山濤が阮咸を典選に擧げて、

阮咸、貞素寡欲にして、深く清濁を識り、萬物も移す能はず。若し官人の職に有らば、必ず時に絶せん。(『晉書』阮咸傳)

と言つたのは、このことを端的に物語つていよう。實はこの阮咸という人間は單なる酒癖の悪い輕薄者で、そのため採用もされなかつたのだが、このような人間をも、その實體とは全くそぐわぬ「貞素寡欲」という言葉で評したところに、この時代の社會通念として、いかにかかる人格が重んぜられたかが如實に表われているように思う。そして、山濤が阮咸を推擧したのは西晉初めのことであったけれども、このような風潮は、少なくとも司馬氏と曹氏

との對立抗争期に入る正始年間以來連續してゐるように思われる。⁽¹⁰⁾

さて、それからまた、すでに官位に就いた者も、上に見てきたような消極的態度をよしとされたようである。これも西晉初頭の資料ながら、夏侯湛の「抵疑」という文章に、

位に居る者は、身を善よむるを以て靜しずと爲し、交はり寡なきを以て慎しんと爲し、弱斷を以て重おもと爲し、怯言を以て信しんと爲す。(『晉書』本傳)

と言うのは、皮肉っぽい反撥的な言辭の中に、かえって當時の風潮が窺い知れて興味深い。

そして、この種の慎しみ深さを持たない者は、たとえその他に優れた徳を備えていても、心情的には人々から疎んぜられたようである。たとえば劉毅という人物は、

幼くして孝行有り、少くして清節を厲おこしうす。然れども好んで人物を臧否さうひすれば、王公貴人、風すがたを望みてこれを憚おそる。(『晉書』本傳)

と、人物批評を好んだがために、王公貴族から敬遠されている。

以上を要するに、魏晉の時代において、消極的かつ慎重な生活態度を實踐することは、決して在野に隱潜することを意味せず、かえってそれが名士としての聲望を高からしめ、仕官へのとば口を開くことにもなったのである。そして、この「慎」というモラルは、當然のことながら官位にある者にも要求された。そうだとすれば、かの張華の「鶴鷄賦」は、まさしく當時における理想的官僚像を、鶴鷄という小禽に託して詠じたことになる。この賦について、いみじくも『文心雕龍』(才略篇)に、

自薦狀としての張華「鶴鷄賦」(田中)

其の「鶴鶴」の寓意は、即ち『韓非』の説難なり。

と評するのは、誠にこの意味であつたと思われる。つまり、言葉一つにも慎重を期せねばならない當時の官僚を、小さな世界にこぢんまりと自足することによって禍害を免れる鶴鶴になぞらえたのだと、このように劉勰は「鶴鶴賦」を解釋したのである。

四

ところで、前章において見てきたように、魏晉の時代、憤たることを賞揚する風潮、つまり放埒さを制御しようとする社會的壓力が存在した以上、それに拮抗する、放縱逸脱をもてはやす社會的風潮も、また一方に存在したであらうと推察される。果して、中島千秋氏が先に紹介した論文の中で夙に指摘されているように、この時代、いわゆる莊子的レトリックを下敷きにして大小全く相及ばぬ存在を並置し、その各々を、世俗を超越した隱者と俗塵にまみれた小吏とに喩える、類型的とも言ってよい構圖が到る所に認められる。たとえば、阮籍の「大人先生傳」は、その最も典型的な文學作品であらうし、また『抱朴子』（外篇）逸民篇や、郭璞の「客傲」（『晉書』本傳引）という文章にも同様の修辭が用いられている。¹¹そして、『晉書』隱逸傳に収録された隱者の人物が、他の時代を壓倒して三十八名の多きを數えるのも、かかる風潮の中で、言葉本來の意味ではアウトサイダーであるはずの隱者にも、人々の尊敬を勝ち得るだけの社會的地位が與えられていたことを物語る。魏晉の間におけるこのような風潮について、干寶の「晉紀總論」に、

風俗は淫僻して、恥尚、所を失ふ。學ぶ者は莊老を以て宗と爲し、六經を黜しりぞく。談だんずる者は虛薄を以て辯べんと爲し、名儉を賤しむ。身わがみを行なむる者は放濁を以て通と爲し、節信を狹しとす。仕を進むる者は苟得かうとくを以て貴と爲し、居正を鄙とす。官に當たる者は望空(めくら判)を以て高しと爲し、勤恪を笑ふ。〔『文選』卷四十九〕

と、嚴しく弾じているのは、東晉において一世を風靡したいわゆる清談亡國論の息がかかっているとはいへ、やはり現實の一端を確實に押さえた評論であるように思う。

ところが張華の「鷦鷯賦」は、このような社會風潮に挑戦するかのようになり、偉大なる存在の絶對的優越性を否定し、鷦鷯のごとき何の取柄もない微禽に敢えて光を當てようとするのである。すなわち、賦の最終段落に次のように言う。

陰陽陶蒸、

陰陽、陶蒸して、

萬品一區。

一區に萬品あり。

巨細舛錯、

巨と細と舛錯して、

種繁類殊。

種繁り、類殊さまざまなり。

鷦螟巢於蚊睫、

鷦螟は蚊の睫に巢すつくり、

大鵬彌乎天隅。

大鵬は天隅たなに彌たる。

將以上方不足、

將はた以て上かみに方くらぶれば足らず、

而下比有餘。

而して下したに比くらぶれば餘り有り。

自薦狀としての張華「鷦鷯賦」(田中)

普天壤以遐觀、天壤を普くして以て遐かに觀るに、

吾又安知大小之所如。吾又安んぞ大小の如く所を知らんや。

以上のように、張華は大鵬と鷦嶼という大小兩極端な鳥蟲を並べ、その中間に鷦鷯を位置づける。だが、この中途半端な存在にすぎない鷦鷯は、視點の据え方次第で、どのようにでもその價値を變換できるのである。最終句の「吾又安知大小之所如」という表現は、李善注に言う通り、後漢の張衡の「歸田賦」を締め括る「苟くも心を物外に縦にせば、安んぞ榮辱の如く所を知らんや」(『文選』卷十五)という句を意識している。そして、張衡がこの結句において、世俗の榮辱を振り拂い、清らかな故郷での生活に回歸せんことを聲高らかに宣言したように、張華もまた一篇を結ぶこの一句において、大小の絶對的價値觀を打ち捨て、鷦鷯のごとき、ささやかながら堅實な生き方を、きっぱりと肯定しているのである。

ところで、先程も言及したように、當時、超俗的隱者を至高の存在に、汲々として榮達を求める俗吏を極小の微生物に寓するような、いわゆる莊子的な物の見方が、一般にかなり廣く浸透していたようである。だがその一方で、憤たることを最も高く評價し、これを官僚に要求するという風潮が、前者を規制し、これと表裏をなすようにして廣がっていたことも、また事實である。そして、このような價値觀の二重構造の中で、超俗的逸脱を志向する貴公子や隱者が存在する一方、文學作品や思想書などには顯著に現れないレベルで、超越者にもならず、かといつてあくせくと貴顯の地位を求めるでもない、ごく普通の官吏たちが多數存在したことは確實である。そらだとすると、極大・極小の存在いづれをも退け、その中間に位置する鷦鷯をこそクローズアップした張華の「鷦鷯賦」は、

まさしく彼の現實社會への眞摯な意氣込みを表明したものに他ならない。そして恐らくは、「莊子」にいう大小いづれの存在にもなりきれず、自ら然るがまま時代の流れに飲み込まれてゆく大多數の官人たちに、この賦は深い共感を持って受け入れられたのではないだろうか。

ちなみに、かの「大人先生傳」を著した阮籍にも、實はこの張華の賦と同趣旨の作品が幾つかある。⁽¹²⁾ 彼がその後半生、すなわち、ちょうど張華の賦を評した頃を境に、彼はそれまでの隱遯生活を翻して司馬氏に就いてゐるのだが、その後半生、對社會的にはこの鶴鶴に類するような姿勢を取っていた、そのことと密接に關連してゐるように思う。ただし阮籍の場合は、私の見るところ、そのような自己の境遇に對して心底から満足し安んじてゐたのではなかったようである。⁽¹³⁾ ところが片や張華の賦の方は、彼がいまだ現實社會の辛酸をなめていない青年時代に作った作品であるためか、心情的な屈折や懷疑がほとんど見えず、まるで頭の中で練り上げた構想が、そっくりそのまま文字に定着したかのような觀がある。そして、張華のこの賦が、西晉以降幅廣い讀者を獲得したのは、實はこの心情的屈託のなさと理論の鮮明さによるところが大きかったのではないかと推察される。⁽¹⁴⁾

五

張華が、極大・極小さいの存在にも屬さぬ鶴鶴を詠ずることによって、かえつて仕官への意欲を表明したことは既に述べた通りであるが、このことは「自足」を旨とする鶴鶴の生き方そのものにも窺うことができる。すなわち、張華の賦における鶴鶴は、たしかに『莊子』逍遙遊篇に登場する鶴鶴そのままに「深林に巢くひて一枝を過ぎ

自薦狀としての張華「鶴鶴賦」(田中)

ざる」がごとき小禽ではあるが、この鳥のいう「自足」とは、矮小な世界を好んでそこに執着することではなかつたのである。このことを示唆するのが、先に挙げた本文の第三段落である。今ここに、重複を厭わず再度抄出してみたい。

棲むに滞る所無く、遊ぶに盤る所無し。荆棘を陋しとせず、菑蘭を榮れとせず。翼を動かして逸ひ、足を投じて安んず。命に委ねて理に順ひ、物に與て患ふこと無し。

このように、萬物の根本法則に従つて自然のままに生きる鶴鶉は、ある一所に執心することなく、荒れはてた荆棘の中であろうが、はたまた香しい菑蘭の花影であろうが、與えられたその場所に難なく自適の境地を見出す。だが、これは裏を返せば、仕官すること、更には貴顯の地位に就くことすら辭さないというほめかしになりはしないか。「菑蘭を榮れとする」ことさえなければ、宮仕えもまた「自足」という言葉で十分に自己肯定し得る生き方なのである。

ちなみに、西晉時代、鳥を詠じた詠物賦において、この「自足」を基調とするものが目立って多い。そして、その内の大部分が、林野での気ままな暮らしはもとより、人家での生活をも満ち足りた幸福として描くことは注目値する。その最も典型的な作品として、たとえば夏侯湛の「玄鳥賦」には、

遂匿形于深穴、遂かくて形すがたを深穴に匿し、

斂六翮而不飛。六翮を斂そまめて飛ばず。

含靜泊以充肌、靜泊なるを含みて以て肌を充たし、

喻至和之精粹。至和の精粹を喻ふ。

澹恬心以去欲、澹として心を恬め、以て欲を去る。

故保生而不匱。故に生を保ちて置しからず。

と、玄鳥の隱逸的生活を幽玄な文辭でもって詠ずる一方で、この鳥が人家に就いてからの生活をも、次のように肯定的に描いている。

爾乃銜泥構巢、爾乃泥を銜みて巢を構へ、

營居傳桷。居を營みて桷に傳く。

積一喙而不已、一喙を積みて已まず、

終累泥而成屋。終に泥を累ねて屋を成す。

拾柔草以自藉、柔草を拾ひて以て自ら藉き、

採懦毛以爲蓐。懦毛を採りて以て蓐と爲す。

吐清惠之冷音、清惠の冷音を吐き、

永吟鳴而自足。永に吟鳴して自足す。〔『類聚』卷九十二、鳥部下引〕

ここに描かれた人家に暮らす玄鳥は、先程の深穴に潛み隠れた時代のそれと、心情的にはほとんど何の差異もない。そして、この鳥は「衆物の害を爲さんことを虞れ、獨り林を弃てて人に憑い」たのだというが、今抄出した部分を見る限りにおいては、かかる切迫した危機意識はどこにも感じられない。

自薦狀としての張華「鷦鷯賦」(田中)

そして更には、夏侯湛の描く玄鳥のように自らの意志によって人家に就いたのではない、人間から強制的に拘束された鳥を詠ずる場合でも、なおその生活を決して束縛としては描かない賦がある。たとえば傅咸の「鸚鵡賦」などは、「慧を以て籠に入れられ」た鸚鵡が人前でその聰明さを披露する様子を詠じた後、結びの句に、

自嘉智於君子、智を君子に嘉せらるるに自りて、

足取愛而揚名。愛を取りて名を揚ぐるに足る。(『類聚』卷九十一、鳥部中引)

と、その出世ぶりを慶賀しているし、また、孫楚の「翟賦」という作品では、この鳥が捕獲され、宮中に収められてからの有様を、

恒逍遙於階庭、恒に階庭に逍遙し、

靡朝陽之盛暉。朝陽の盛暉に靡はる。(『類聚』卷九十、鳥部上引)

と、きわめて安逸気ままな生活として描いている。

以上を要するに、西晉における詠物賦の多くが「自足」という哲學概念をその基調とし、そこでは、鳥本來の棲息地を離れて人家に就いたものまでが、その境遇に安んじているかのよう描かれる。この點において、後漢末から魏初にかけて、建安文壇を中心に作られた詠物賦群とは大きな隔たりがあるように思われる。すなわち、建安賦の鳥たちにとって、華やかな宮廷生活も、わが身の自由を奪い取る牢獄以外の何者でもなかった。ところが一方西晉賦における鳥たちは、そのような拘束された境遇の中にあっても、なお「自足」という哲學のおかげで心安らかに暮らすことができるのである。詠物賦におけるこのような作風の違いは、そのままその作者たちの思想的基盤

の違いを物語るであろう。

ところで、張華の「鶴鶴賦」を始めとして、「自足」をテーマとする詠物賦が盛んに作られたこの時代、不遇な者が「自足」のポーズを取ることは、憤たることに價値を置く社會風潮、及び莊老思想の流行と相俟って、實はかなり一般に類型化していたように推察される。このことを端的に示す一資料として、第三章でもその一部を紹介した、夏侯湛の「抵疑」という文章がある。『晉書』本傳によると、彼は泰始中（二六五—二七四）に賢良に擧げられ、對策に及第して郎中に拜せられたが、その官位は何年も據え置かれたままだった。そこで、この文章を作った鬱憤を晴らしたのだという。彼はこの中で、當路子と夏侯子との問答を通してわが身の不遇さをかこちながら、一方では世俗的野心のないことを繰り返して言明し、自分の寡欲さを強調することを忘れていない。たとえば、次に擧げる一節などは、その屈折した自負心と表裏一體の自己卑下を如實に表わしているように思う。すなわち、夫れ干將の劍は、陸に狗馬を斷ち、水に蛟龍を截つ。而るに鈇なまの刀は泥にも入る能はず。……鴻鶴は一たび擧がれば四海の區を横ぎり、青雲の外に出づ。而るに尺鷃は桑榆をすら陵しのがず。此れ利鈍あきらの覺にして優劣の決せるなり。……僕以て心思を竭くし才學を盡くせしも、意に雅正きしんにして準とす可き無く、論に片言の探る可きも無し。是を以て鄙劣に頓まりて之れを能く起こすもの莫きなり。此れを以て之れを言へば、僕何爲なんすれぞ其不自らかならず街かへまんや。子（當路子）は僕の徳の劬うつくしからざるを嫌はず、而して其の位の到らざるを疑ふ。是れ猶ほ鏡を反かへして照を索もとめ、木に登りて釣を下すがごときなるも、僕未だ此れを以て不肖と爲さざるなり。（『晉書』本傳）

以上の文章に窺われるように、表向きは自己の卑小さを認める姿勢を見せながら、その實彼は、埋もれたわが才能

自薦狀としての張華「鶴鶴賦」（田中）

に對して傲岸なまでの自信を持っているのである。

そして、夏侯湛の文章にみえるこうした屈折は、ただ單に彼その人の個性によるばかりでなく、「自足」という當時の流行思想が、奇妙にねじられ強められて表出したものではないかと考えられる。いづれにせよ、自己の分に安んずる恬淡寡欲さは、魏晉時代における理想的人格と呼ぶべきものであった。そして、この時代の文學作品も、この一種の社會的規範から完璧に自由ではあり得なかつたように思う。ただ、ここに言う「自足」とはあくまで建前であつて、この看板さえ掲げておけば、與えられるままに官職を得、その地位に安んずることはもちろん、天命に従つて貴顯の地位に就くことさえも十分に可能であつた。

さて、以上のことから推測するに、張華がその「鶴鷓賦」においていかなる境遇にも自足する小禽を詠ずるとき、それは彼の仕官への野心を暗示したとみてはば間違いないであろう。そして、私のこの假説にとつて、一つの有力な傍證になると思われるのが、「鶴鷓」の語に付された『文選』李善注の一條である。彼はここで吳人陸機の『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』（佚）を引く。すなわち、『毛詩』本文中の語句「桃蟲」に對して、

今の鶴鷓、是なり。黃雀よりも微小なり。（しかれども）其の鷓は化して鷓わと爲る。故に俗語に「鶴鷓、鷓を生む」といふ。（『毛詩』周頌、小瑟、正義引）

と注するのを、李善は張華のこの賦のためにわざわざ引用しているのである。この注によれば、鶴鷓という鳥は黃雀ほどの大きさにも満たない小禽ではあるが、反面、成長して鷓わに生まれ變わるという潜在的な天分をも秘めているという。もしも、張華がこのことを明確に意識して、意圖的に鶴鷓を詠じたのだとしたら、これはもう明らかに

仕官への意欲を表出した自薦状と呼ぶべき代物であろう。また假に彼自身それと意識していなかったとしても、一般に鶴鶴に對するこのようなイメージが廣がっている以上、作者を離れた作品は、おのずから張華自らの推薦状として人々に働きかけるようになる可能性が強い。そして、いずれの場合とも、鶴鶴にまつわる卑小なイメージの方を前面に押し出せば、それで少なくとも傲慢不遜の譏りは免れることができるのである。要するに、鶴鶴という鳥が、誠に『莊子』に言う通り「深林に巢くひて一枝を過ぎざる」がとき小禽である反面、このように偉大な存在に成長し得る將來性をも併せ持つところに、私は張華のこの賦の意圖を重ね合わせるができるように思う。

六

以上を要するに、張華の「鶴鶴賦」は、莊子的な萬物齊同の思想を土臺に、小さな世界に自足する鶴鶴の生き方を全肯定的に描いた賦であるが、このような内容を持つ作品は、當時、社會的には自薦状として機能した。すなわち、超俗的な隱者をもてはやし、慎しやかな社會生活を營む官吏を蔑む風潮のある反面、官吏たる者の條件として「慎」たる事が最も高く賞揚された當時にあって、鶴鶴のごとき小禽を正面切つて詠ずるということは、まさしく仕官への意欲を表明することに他ならなかったのである。そして、張華自身も、このことを十分に意識していたように推察される。

ところで、以上のように考えると、一見不均衡なように感ぜられる「鶴鶴賦」の構成も、にわかには合點のいくものとなってくる。すなわち、この賦が鶴鶴という鳥名をその題に冠していながら、全篇の半分近くを費して、この

鷓鴣とは對照的な、有能秀逸であるが故にその生を全うし得ぬ鳥たちを列挙している、このことについてである。今その本文を抄出すれば以下のごとくである。⁽¹⁵⁾

鷓・鴣は其の嘴距を介とし、鷓・鷺は雲際に軌る。鷓鴣は幽險に竄れ、孔、翠は遐裔に生つ。彼の晨冕と歸鷹とは又翼を矯げて増逝す。(しかれども) 咸美羽にして豊肌なるが故に罪無くして皆斃る。徒に蘆を銜へて以て繳を避けんとするも、終に此の世に戮せ爲る。蒼鷹は鷲くして緹を受け、鷓鴣は恵ければ籠に入る。猛志を屈して以て養に服し、塊として九重(の宮中)に幽繫せらる。音聲を變じて以て旨に順ひ、翮を推きて庸(＝用)を爲さんことを思ふ。(しかれども) 鍾岱の林野を戀ひ、隴坻の高松を慕ふ。幸を今日に蒙ると雖も、未だ疇昔の従容たるに若かず。海鳥たる鷓鴣は風を避けて至り、條枝(國)の巨雀は嶺を踰えて自つて致り、萬里を提絜し、飄飄として逼畏る。夫れ體大きくして物に妨はると唯も、形壞れたれば瑋ぶに足るなり。

このように幾種類もの鳥を登場させ、しかもそれぞれについて相當に念入りな文辭を施しているのは、ただ鷓鴣の存在を際立たせるためだけだとしたら、やや冗長に過ぎるようにも感ぜられる。だが、一見不必要に思われるこの部分も、この賦が張華自らによる自薦狀であるとするならば、その意圖に合致した、きわめて有意義なものとなる。つまり、これら多種多様な鳥たちを、それぞれその典故を押さえながら列挙することによって、張華は自分の博物學的知識の豊富さ、及びそれを陳述する文學的才能とを披露したのではないかと考えられるのである。言うまでもなく、當時において博學であることは非常に高く評價されたし、また實際、『博物志』の著者として知られる彼は、起家の後まもなく、果たしてその該博な知識をもって天下に榮名を馳せることになる。この賦における多種

多様な鳥の列擧を、かかる將來への布石とみる推測も、決して不可能なことではないように思う。

さて、そもそも賦という文學ジャンルは、様々な事物を鋪陳することにその意義を持つと言つてよい。ところが後漢末の建安文學以降、少なくとも詠物賦の分野においては、そうした賦本來の重厚な性格は薄れ、どちらかというと氣輕なスケッチ風の小品が多いようである。その中で、中心的題材の鶴鶴のみならず、その他各種様々な鳥をも入念に描き盡くす、鳥類の博物誌とも言うべきこの張華の「鶴鶴賦」は、當時としては珍しく、堂々とした賦本來の風格を誇る作品である。恐らく張華は、この作品が有力者の目に入ることを強く意識して、自己の持てる才能全てをこの賦に注ぎ込んだのではあるまいか。

ちなみに、張華と同時代の張敏という人は、その「頭責秦子羽」という戯文の中で張華を含む數人をあげつらい、彼らが共通して持つある種の鄙陋さを揶揄した後、その幸運な起家に言及して次のように言う。すなわち、

而れども猶ほ文彩の觀る可く、意思の詳序せるを以て、龍に攀^{すが}り鳳に附きて、並びに天府に登る。〔世説〕排調篇

ここに評された「文彩」や「意思」が、直接に「鶴鶴賦」のそれを指すわけではないが、ただ少なくとも、張華が仕官に對して決して消極的ではなく、その「鶴鶴賦」も、修辭をこらしてわが才能を顯示した、いわば自薦文であった可能性が強いということを、この資料は、間接的ながら物語っているように思う。

要するに、小さな世界に自足する鶴鶴の生き方を、様々な鳥たちと對比させながら詠ずる張華の「鶴鶴賦」は、その内容の面からも、また修辭に對する並々なぬ力の入れ方から見ても、彼自身による自己推薦状とみてほぼ間

自薦状としての張華「鶴鶴賦」(田中)

違わないであろう。ところで、仕官への野心と莊老的「自足」の思想とをかくも自然に合體させたこの賦が、かの強烈な個性によって「莊・老」を體現した阮籍・嵇康と、全く同時代の産物であることはきわめて注目し得る。というのは、莊老の思想家が儒家との妥協を容認したか否かという基準の下に、從來とかくその斷絶面ばかりが強調されがちだった魏末晉初の思想史を、今根本から問い直し、改めて連續的な複數の線によって捉え得る可能性を、このことは力強く示唆しているからである。この問題については、今後、もっと幅廣く資料を涉獵した上で、再び考察し直してみたい。

注

- (1) 張華によってその才能を認められた代表的人物として、陸機・陸雲兄弟、「三都賦」を著した左思、『三國志』の著者である陳壽などが擧げられる。
- (2) 『文選』卷十三所收。本文は李善注に従って讀み下した。
- (3) 『類聚』卷五十三、治政部下引『徐廣晉紀』に次のごとく言う。すなわち「張華、少自牧羊而篤志好學。初爲縣吏。盧欽奇其才、數稱薦之。」
- (4) 拙稿「阮籍『彌猴賦』試論」(『日本中國學會報』第三十八集) 參照。
- (5) もしも、ここに言う「推」が推舉の意味であれば、この記事は明らかに誤りである。すなわち、他ならぬ張華が
- (6) 卓抜した歴史批評家である唐人劉知幾も、その『史通』(外篇、古今正史)において、「子(王)隱、博學多聞、受父遺業、西都事迹、多所詳究」と、王隱の仕事が高く評價している。
- (7) 注(3) 參照。
- (8) 「王佐之才」の最も的確な用例として、『漢書』董仲舒傳、贊にいう「董仲舒有王佐之材、雖伊(尹)呂(望)亡以加、筦晏之屬、伯者之佐、殆不及也。」が擧げられる。
- (9) もっとも、嚴密に言えば、「貞素寡欲」であることと「耽

「酒浮虚」とは對立する概念ではなかつたようだが。

(10) 正始年間、母丘儉が大將軍曹爽に裴秀を推薦する際、やはり「玄靜守眞」といった評語を用いている。(『晉書』裴秀傳)ただし、このように消極的人格を尙ぶ風潮は、莊老の流行とも關連づけて考察する必要がある。

(11) いずれも、先に擧げた中島氏の論文の指摘による。

(12) たとえば、「詠懷詩」其十、二十六、二十七、及び「答伏義書」などがある。また、「彌猴賦」には、かかる「自足」の思想に對する阮籍の正直な心情が表われていて、興味深い。

(13) 注(4)参照。

(14) 『文心雕龍』章表篇に、張華の章表が不當に輕視されがちなることを述べて「世珍鶴鷄、莫顧章表」という。また、張華の「鶴鷄賦」に異議を唱える賦、すなわち傅咸の「儀鳳賦」及び賈彪の「大鵬賦」があるということは、この賦が談論の話題としても十分にその任に耐え得たであろうことを示唆する。

(15) この部分を、第三章及び第四章にて抄出した部分の間にはめ込めば、張華の「鶴鷄賦」一篇が完成する。